様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　３月３１日現在

機関番号：２４３０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１５２０１０６

研究課題名（和文）　南インド、ケーララ地方に現存するヒンドゥー教壁画の技法的・様式的研究

研究課題名（英文）　Technical and Stylistic Studies of Hindu Murals in Kerala

研究代表者
定金　計次（SADAKANE KEIJI）
京都市立芸術大学・美術学部・教授
研究者番号：40135497

研究成果の概要（和文）：ケーララ地方のヒンドゥー教壁画は、現存作例に関する限り 12 世紀に現れ 19 まで描き続けられ、16 世紀に独自の技法・様式が完成した。ケーララ地方壁画が完成を迎えるに至った条件は、種々想定出来るが、当地域に木造寺院建築及び木彫の伝統が確立したことと、ヨーロッパ人が多く来航し、ヨーロッパ絵画が多数齎されたことが特筆される。他地域には見られない極めて特徴的な壁画様式が完成するためには、地域独自の造形文化を形成する動きと、国際的な造形文化の影響とが大きく作用したと見るべきである。

研究成果の概要（英文）：We have extant examples of Hindu mural paintings from the 12th through the 19th century in Kerala. The typical technique and style of Kerala Hindu mural painting attained maturity in the 16th century. We believe that the cause for it was manifold. A lot of European paintings brought to Kerala and the wooden sculpture style proper to Kerala was completed then. The full growth of regional plastic culture and the international influence of plastic arts can be thought to have created the unique mural painting technique and style of Kerala.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史
キーワード：美術史・南インド・ヒンドゥー教・壁画

１．研究開始当初の背景

インドにあっては、古代の早い時期から壁画が絵画の中心として発達を始め、様式・技法を発展させながら、また主題を変化させつつ近代に至るまで描き続けられた。インドの南西端に位置するケーララ州には、中世から近代初、具体的には 12 世紀から 19 世紀に掛けて、ヒンドゥー教寺院と王宮を中心に比較的多くのヒンドゥー教に係わる主題による壁画が残されている。遅くとも中世末近い頃には、他地域とは異なった、独自の様式が確立したことが明らかである。その後は、様式の独自性を保持しながら、ケーララの中で地域や制作時期によって異なった、言わば多様な展開が見られる。

インドの他の地域においても、古代の伝統

が根強く残り、同じ時期に多くの壁画作例を見ることが出来る。例えば、ラージャスターンやパンジャーブ山地には、近世壁画の作例が多く残存している。ただ、かかる地域の壁画は、近世における紙絵の発達が著しく、紙絵で展開した様式・技法を壁画に用いたと捉えることが出来る。しかしながら、ケーララ地方で中世から近代に掛けて描かれ続けた壁画は、紙絵の様式・技法を壁画に転用したものでなく、元来壁画として発展したと考えられる。その点で比較的制作時期が遅いインド壁画としては、非常に際立った特質を有していると言える。

ケーララ地方の当該壁画作例について、早くから知られ公刊されているものは、非常に限られている。コーチ（旧名コーチン）のマッタンチェーリ宮壁画は、夙に名高く、解説を付した図録が V. R. Chitra と T. N. Srinivasan によって *Cochin Murals* という名で 1940 年に出版されている。その後、目立った出版はなく、比較的最近になって、ようやく研究書と呼べるものや詳細な図録が出版されるようになり、ある程度壁画の残存作例に関して実態が明らかになりつつある。例えば、A. Frenz と K. K. Marar による *Wall Paintings in North Kerala, India* が 2004 年にドイツで、また A. Ramachandran による *Painted Abode of Gods: Mural Traditions of Kerala* が 2005 年にインドで出版されている。それらによって、インドの他地域に見られない独特の様式を持った壁画の概要が紹介された。ただケーララ地方固有の技法と様式が、どのように形成され、如何なる過程で発展して行ったかという美術史的な問題については、本格的な検討は未だなされていない。

古代の早期に成立し展開を始めたインド壁画の永い伝統において、言わば最終段階を飾るケーララ地方の壁画に関しては、
貴重な現存作例の一部が剝落等によって失われつつあることをも顧慮して、正統的な美術史の研究対象として、成立と展開に係わる状況を解明することが、当該壁画が有する独自の価値を明らかにするためにも、またインド美術全体にとって研究の水準を高めるためにも、急がれると考えられる。

２．研究の目的

本研究は、南インド西南端に位置するケーララ州及びそれに隣接する地域に現存し、12 世紀から 19 世紀まで描き続けられ、固有の特質を一貫して保持したヒンドゥー教壁画について、現地調査により資料収集を行い、技法及び様式的側面から考察するものである。当該壁画は、独自の特質が見られ、インド絵画史上で重要な位置を占めながらも、一部のみが一般に知られているに過ぎない。上に述べたように、かかる壁画の美術史的研究は、厳しい意味で未だ手付かずの状態である。本研究は、現地を丹念に調査し、多くの作例について資料を集め、今日まで明らかにされていない、独自の性格を持った様式の成立過程を探究し、更に技法と様式の展開を詳細に辿った上で、同時代に他地域で描かれた絵画との関係をも含めて、インド絵画史における正確な位置付けを行うことを目的としている。

３．研究の方法

本研究は、大きな意味で研究の基礎が充分確立していない分野を対象としているので、現地における調査に重点をおく。研究対象の壁画が現存するのは、ヒンドゥー教寺院とヒンドゥー教を信奉した支配者の王宮である。従って、かかる施設を実際に訪れ、適宜拡大鏡などを使用しつつ、目視により慎重に観察することを調査の主体とする。しかしながら、目視による調査はかなりの時間を要するため、それに拘泥し過ぎると、現地で調査出来る壁画がかなり限定される。そのため、写真撮影を同時に行うことが避けられない。よって壁画をフィルム・カメラ及びデジタル・カメラによる写真撮影を行い、目視による観察結果と共に、研究のための基本資料を得る。に種類のカメラにより撮影するのは、研究資料として、研究対象の明らかにしたい側面によって、画像資料を使い分ける方が、より客観性の高い結果が得られるからである。その際、言うまでもなく構図の特質を分析し得るような画面全体の撮影はもとより、技法の詳細が検討し得る細部の撮影も行う。

現地調査は、無論ケーララ地方を主とするものの、後述するように、この地域は、北及び東に隣接する地域に比べて、美術が本格的に展開した時期が若干遅く、かかる隣接地域、即ちカルナータカ地方とタミル・ナードゥ地方の美術の影響を多かれ少なかれ受けて、美術が発達したと考えられることから、これらの地域においても、先行する時代及び同時代の壁画作例に関しても、ケーララ地方と同様に現地調査を実施する。

４．研究成果

(1) ケーララ地方における壁画の始まり

ケーララ地方特有のヒンドゥー教壁画は、12世紀頃の早期の作例が確認されている。この地域は、南端近くに中世初めの9世紀頃に開かれたヒンドゥー教石窟があり、壁画も状態が悪いながら確認出来るけれども、続く時期の作例がなく、その後の展開が不明である。現存作例に関して、北及び東の隣接地域、具体的に述べればカルナータカ州とタミル・ナードゥ州に比べて、規模の大きなヒンドゥー教寺院が建立され美術が展開するのが遅かったと言うことが出来る。石造寺院の建立が本

格化した12世紀に描かれたと見られるケーララ地方に現存する初期ヒンドゥー教壁画は、カルナータカ及びタミル・ナードゥ地方の影響を受けたと考えられる。つまり北と東の隣接地域の中世壁画と大きくは違わない。壁画は、石造寺院建築の主として外壁に描かれている。寺院外壁は、多くの壁柱で区切られるのが常であったから、一つの壁画画面は、縦長の形態で比較的狭い。ヒンドゥー教寺院における壁画主題は、ヒンドゥー教の神格或いは神話である。これは、壁画の技法・様式が完成する時期まで大きく変化しない。

様式に関して、例えば、マニユールのスブラフマニア寺壁画（図1）は、僅かの面積しか残らないため、判断するのが難しいものの、技法・様式共に、いずれかの地方の影響が及んだことが窺える。それより若干制作時期が遅れると見られるヴェーラムのマハーガナパティ寺壁画は、様式がやや相違して、或いはタミル・ナードゥ地方の影響が及んでいる可能性が指摘出来る。それより遅れ13世紀の造営と考えられるパリヤラムのスブラフマニア寺壁画（図2）は、様式の発達が見られ、スリランカのポロンナールワに残るティヴァンカ堂の壁画に極めて近似する。特にスリランカの壁画と異なる点で注目されるのは、一部の神格が頭光の回りに緑色の雲を巡らして、頭部を明瞭に他から区別していることである。頭光を持たない人物には、緑の頭髪を頭部の回りにあふれるように描いて、同様の効果を齎していることもある。

図1

図2

今述べたように、僅かながらケーララ地方独自の形式が生じているものの、この時期の壁画に関しては、タミル・ナードゥ地方とケーララ地方及びスリランカの関係が密接で、広い領域で様式が共有されたと想定出来る。但し他地域の壁画と比較して、装身具のやや過剰な表現に当地の地域性を窺うことが出来る。

(2) ケーララ地方固有の技法・様式の発達

現存作例が非常に限られるため、続く14世紀におけるケーララ地方壁画の一般的動向とし得るかどうか不確かで、断定は憚られるものの、アナンテーシュヴァラのアナンタ・パドマナバスヴァーミー寺壁画（図3）から、ケーララ地方独自の技法・様式の展開が観察出来る。

図3

同寺壁画は、上下二層の存在が確かめられる。制作が早い下層壁画は、14世紀の作と考えられ、17世紀に描き直されたと看做し得る上層壁画とは大きく異なっている。

ケーララ地方だけでなく、大きくインド絵画史全体で捉えた場合、14世紀は、古代以来インド絵画技法の重要な側面であった暈取りが退化した時期に当たる。ケーララ地方を含む南部インドでは、比較的絵画の技法・様式は保守的で、暈取りの退化現象も緩慢であった。しかし、南部インドの壁画作例は、ケーララ地方以外でも僅かであるが、確実に暈取りが退化傾向にあることが窺える。

同寺下層壁画においては、主要人物に暈取りの使用が確かめられるものの、それ以外の人物に明らかに暈取りが施されていないものが多く見受けられる。それと同時に、装身具の誇張した表現を継承しつつ、描かれた諸形態に単純化の傾向が顕著であり、同時代他地域の作例との共通点が判然と認められる。かかる点から、同寺壁画はかなり限定された作例ながら、同時代ケーララ地方壁画一般が有していたと推測される特質をかなり良く呈示していると考えることが出来る。

上に述べたような同時代他地域絵画共通した性格と別に、同寺壁画には、ケーララ地方固有の技法・様式についても展開していることが認められる。特に丸顔に表された顔貌や過剰な装身具などが挙げられる。

続く15世紀には、寺院建立が活発化し、壁画制作が盛んになり、独自の技法・様式の形成が促進されることとなった。それには、幾つかの要因が考えられる。一つは、現在も周辺地方に比して降雨量が多く樹木の生育が豊かで、固有の木造ヒンドゥー教寺院が発達すると同時に、独自の木彫が展開したことが挙げられる。またヨーロッパ人が新たに開拓された海路により多く渡来し、ヨーロッパ絵画の影響が及んだことも要因の一つに数えられる。更に政治や支配に関わる背景として、かかる国際的な交流によりインドにおける香辛料の最大産地として当地の地域経済が大きく活性化し、中世後半に当地の支配が細分化され成立していた地方政権の支配者達が、寺院の建立と壁画制作に大きく係わったことが、壁画の様式・技法が大きく展開し確立する基

盤となったと見られる。

15世紀のケーララ地方壁画に関しては、例えばパナプザのコロタッパン寺壁画（図4）に見られるように、14世紀の壁画の技法・様式を継承しつつ、太い輪郭線で形態を表現する一方、一部に細かな装身具等を表す線描を用いるなど、次代に繋がる新たな描写法を認めることが出来る。更に前世紀に退化傾向にあった暈取りを積極的に使用し、人物をやや肥満した形態に描くと同時に、比較的狭い画面内において複数人物を複雑に組み合わせる傾向もはっきり看取出来る。かかる特質も、次世紀壁画で大きく発展するものである。ただ幾つかの側面で、ケーララ地方固有の技法・様式は未だ完成の域に達していないと言うことが可能である。

図4

(3) ケーララ地方ヒンドゥー教壁画の完成

16世紀を迎えると、前世紀までと比較してヒンドゥー教寺院の造営が多くなり、それに伴って壁画が多く制作され、現存作例も豊富になる。それと共に、地方のヒンドゥー教を奉じた支配者の王宮にも、王の宗教儀礼と係わった壁画が描かれ、それも含めて作例に大きく恵まれるようになった。ヒンドゥー教寺院壁画としては、トーディカラムのシヴァ寺院外壁（図5）、王宮壁画では、コーチのマッタンチェーリ宮上階王寝所壁画（図6）が代表的作例と言える。完成期壁画に関しては、ケーララ地方内部での地域的な差違が比較的小さい。

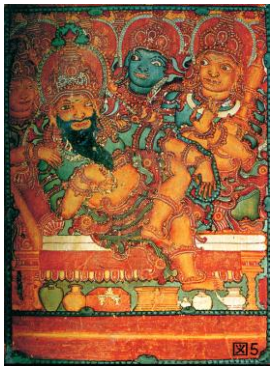


図5

王宮は、基本的に木造で造営され、またヒンドゥー教寺院についても伝統的な石造に加えて木造が発達し、地域的な独自の形式が形成されることで、従来と比べて広い画面が現れることとなった。また石造寺院では外壁を中心に壁画が描かれることが多かったが、壁画で飾られた王宮が建設されるようになり、王宮においては室内の壁に壁画が描かれるのが通例であり、寺院と異なり保存状態の良好な壁画が現存することで、壁画の技法・様式が観察し易い場合が多い。このように大きな画面に描かれた壁画では、既に発達していた複雑な密集的構図が、更に展開した形で採用され、16世紀の完成期壁画の大きな特徴となっている。これは、インドを南北で二分した場合、古代以来南インドが有していた構成上の特質であり、実際に展開した背景には様々な要因が想定されるものの、南インドの一部としてのケーララ地方の近世における伝統の根強さと解することも可能である。

図6

16世紀に完成したケーララ地方固有のヒンドゥー教壁画の技法と様式の特質は、以下の通りである。

まず絵具は、黒（煤）・白（白土？）の無彩色と、赤（ベンガラ）・黄（黄土）・緑（緑土？）の有彩色顔料に加えて青色として染料の藍が用いられたと見られる。青色が塗られた部分については、緑色顔料を塗布した上から青が塗り重ねられたように観察される。

制作過程に関しては、古代以来の伝統的な方法が採用され、下描き・彩色・暈取り・描き起こしの順に制作されたことが明らかである。描き起こしに用いられた黒色の線質は、前後の時期については必ずしも同様とは言えないが、この時期には、肥瘦が殆どなく、しかも先が利かない筆で引いたような、換言すればペン描きに近い、比較的細い線が用いられている場合が多い。恐らく、穂先が鋭くない細い毛筆が使用されたのであろう。

壁画の描写対象の主体は、神像画・神話画は無論のこと、完成期以降王宮壁画に多く見られるようになった叙事詩等、神話画以外の説話画においても人物である。この点は、インド美術の大きな伝統の中で捉えることが出来る。

完成期のケーララ地方壁画の主な特徴は、言うまでもなく描かれた人物の表現方法にある。前代に既に独自の傾きが顕在化していた面貌表現が押し進められ、顔貌・体軀共に極めて肥満した状態に描かれている。かかる表現上の特質は、人体の各所において施された濃い暈取りによって更に強められている。但し、首や腰或いは身体における関節等においては、適宜締まりのある形態で表現され、全体として抑揚に富んだ形を呈している。また面貌にあっては、目や口などの構成要素が、身体の他部分と調和するように、目立って大振りに大胆に誇張して描写されている。それに加えて冠や装身具・衣服は、肥満した頭部

や体軀と均衡を保つべく、言わば非常に豪奢な印象を与えるように、現実の形態より描写が相当誇張されている。別の側面から捉えれば、肥満して描かれた肉体を、装身具等で更に肥大化させ強調していると言うべきかも知れない。特にかかる装身具や衣服の点では、画面に装飾的効果が大きく賦与されていると把捉することも出来る。一見して感じられるケーララ地方壁画固有の過剰な装飾性は、主としてこのような点から生じると解し得る。

16世紀のケーララ地方壁画をある意味で最も目立って特徴付ける特殊形式が、画面の枠飾りに使われている一種の連珠文とも言うべき、片側のみ小球を連ねたように等間隔に括れを表し暈取りを施した紐状の形態が、密集する人物や動物等の輪郭にも適応されている点である。

なお、かかる連珠文に類する紐状形態は、比較的長く連続する場合、単調さを避けるためか、連なる小球より大型で、球体の一部を窪ませるとともに餅状に扁平にし、更に窪んだ場所に小粒を付けたような形をほぼ等間隔に加えることがある。また作例によっては、紐状形態を用いずに、頭部周囲に小粒を付けた餅状形態を幾つか用いつつ、やや広い面積を彩色する場合が見られる。上に取り上げたパリヤラムのスブラフマニア寺壁画における頭光回りの彩色を想起させる。

また、今述べた紐状形態の彩色は、通常暈取りを含む緑色、時には青色でなされことが多いものの、基本的にかかる形態が縁取る形象、つまり紐状形態の内側に接する色によって、同様に暈取りを施された赤色に替わることが基本であった。詳しく述べれば、画面の多くの形象は、赤系の彩色が施されているため、紐状形態は大抵緑色であるが、内側に接する色が黒や緑または青、あるいは寒色系淡色などの場合、赤で彩られる。但し、内側に隣接する色が頻繁に変化するときは、必ずしも紐状形態の色は基本通りに替わることがなく、色の交替は幾らか纏めて単純化される。

紐状形態の用いられ方は、ある面不可解と言わねばならないが、人物などの形が誇張されている割に、輪郭線が細く、しかも密集的構図で配置されているため、どうしても画面における主要人物などの主たる形象が不明瞭になる傾向が避けられず、それを解消するための工夫として考案されたと推察し得る。あるいは、パリヤラムのスブラフマニア寺壁画に見られた表現が源泉の一つであったかも知れない。加えて、かかる表現の副次的効果として、密集的画面構成の単調さを回避することや、既に様式的特徴に含まれていた装飾性を更に増加することが挙げられ、画面空間における形態の論理性から見れば、不条理な描写ながら、ケーララ地方壁画にかかる形態が定着したと考えることが出来る。

(4)17世紀以降の展開

ケーララ地方壁画は、17 世紀以降、壁画様式が全体として単純化する傾向を見せるが、同時に場所によりヨーロッパ絵画の更に強い影響も現れた。ケーララ地方内における地域性、あるいは同じ地域でも画家による差違などにより、比較的多様な展開が確認出来る。概して、北部ではカルナータカの、南部ではタミル・ナードゥの様式と共通の特徴を見せるようになった。

図7

北ケーララ地方では、完成期の様式を継承しつつ、壁画様式が単純化する動きが目立つ。ただ、完成期の特質を基本的に保持しつつ、人物の表現における誇張が更に激しくなる場合と、プラメーリのカラヤット・ヴィシュヌ寺壁画（図 7）のように、ヨーロッパ的文様を装飾に用いると同時に、誇張の度合いを高めながら形態の抽象化も進行している場合が認められる。後者に当て嵌まる壁画では、連珠文により輪郭を飾ることが殆どなくなった。

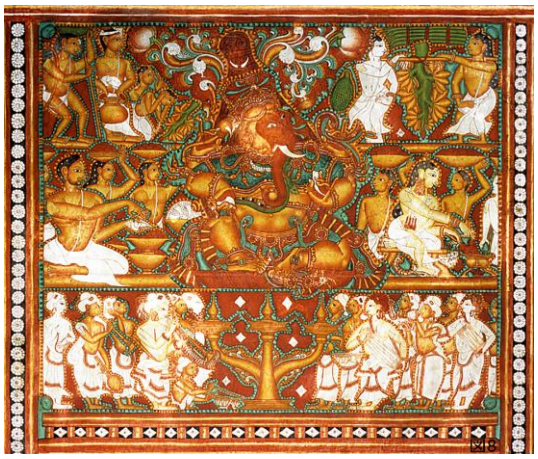
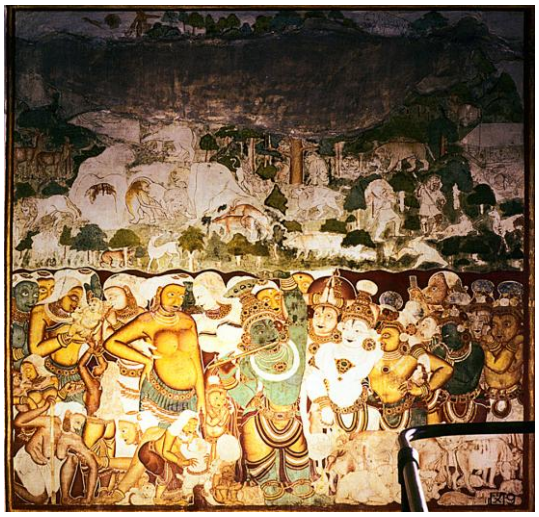


図8

南ケーララ地方では、パドマナバプラム宮王寝所壁画（図８）のように、制作時期が 18 世紀まで下るものの、完成期壁画の技法・様式の多くを保持しながら、描写対象の形態が全体に単純化すると同時に、構図も整理されているのが看取される。またタミル・ナードゥ地方の影響を受け、人物の面貌が面長に変化していることも確認し得る。



特に同じ場所に描かれながら、制作時期や担当画家の違いによる大きな差違を示すのが、コーチのマッタンチェーリ宮下階壁画である。貴婦人室壁画（図 9）では、描写の中心をなす人物は、複数を密集的に表すものの、その周囲にはヨーロッパ絵画の影響を強く受けた、三次元的な環境描写が、中心をなす人物群に比べて個々の描写対象を縮小して広い面積に描かれている。

また下書きの段階で終わっている階段室壁画（図 10）においては、完成期壁画より繊細な筆遣いによりベンガラの赤線を用いて、下描きにも拘らず、緻密な形態描写がなされている。完成期とは異なり、先の利く毛筆が使われたと見られる。現状を見る限り、貴婦人室壁画に比べてヨーロッパ絵画の影響が取り分け顕著でないものの、線だけで表現された形態の把握の仕方に立体的な描写が見受けられ、環境描写が特になされていないため、判り難いけれども、やはりヨーロッパ絵画の影響が及んでいるのが認められる。かかる壁画においては、完成期壁画の特殊な輪郭を飾る紐状形態は、無論全く使用されていない。

図10

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 定金計次、マッタンチェーリ宮下階階段室「シヴァとパールヴァティーの結婚」壁画、美（京都市立芸術大学美術教育研究会）、査読無、第 187 号、2012、pp. 1–2
② 定金計次、マッタンチェーリ宮下階貴婦人部屋「女性達と戯れるクリシュナ」壁画、美（京都市立芸術大学美術教育研究会）、査読無、第 186 号、2012、pp. 1–2
③ 定金計次、マッタンチェーリ宮上階階段室「シヴァとパールヴァティー」壁画、美（京都市立芸術大学美術教育研究会）、査読無、第 185 号、2011、pp. 1–2
④ 定金計次、マッタンチェーリ宮上階王寝所『ラーマーヤナ』壁画、美（京都市立芸術大学美術教育研究会）、査読無、第 184 号、2011、pp. 1–2
⑤ 定金計次、インド・ケーララ州の王宮壁画、視覚の現場、査読無、Vol. 8、2011、pp. 32–33
⑥ 定金計次、一世紀中頃乃至二世紀前半のインド彫刻に見られるターバンの形式変化－石彫作例の制作年代に関する一指標として－、西南アジア研究、査読有、No. 73、2010、pp. 19–51

〔図書〕（計１件）

①津田徹英・田中公明・定金計次、他、竹林舎、仏教美術論集２　図像学 I—イメージの成立と伝承（密教・垂迹）、2012、396

６．研究組織

(1)研究代表者
定金　計次（SADAKANE KEIJI）
京都市立芸術大学・美術学部・教授
研究者番号：40135497

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし